

「やだゝゝっ！　また持ってるやつう！　欲しいのはライブ衣装バージヨンの流星くんなのになゝゝゝっ！」

ハサミで丁寧に開封したばかりのアクスタを握りしめてわたしは半泣きで叫んだ。

もう一個引いちゃう……？　いや、ダメダメ！　流星くんがいつも言ってるし。

「僕はみんなに無理はして欲しくないんだ。何よりも自分自身を大事にしてね。できる範囲で応援してくれるだけで嬉しいんだ」

そう、わたしの推しである院真流星（いんまりゆうせい）はとてもファン思いのアイドルだ。このグッズだって最初は20通りのランダムだったのを流星くんがファンの負担に心を痛めて運営に掛けあってくれた。

結果、AパックとBパック10通りずつに分かれて販売された。わたしの欲しいのも狙いやすくはなっただけだ。

なのに、なのに。今出たのは流星くんですらない。別のメンバーだ。

流星くんはピンク色の髪の王子様のビジュアルで歌唱力も演技もずば抜けている。彼の属するアイドルグループNova6（ノヴァシックス）自体もトップアイドルだ。その中で断トツ人気ナンバー1。

実際、交換希望の募集をXで調べてみると流星くんをみんな欲しがっていて、他メンバーのアクスタでは複数まとめて募集が出ている。交換の競争率が高すぎる。

「流星くん、レート高すぎだよ。人気ってことは嬉しいけど……」  
こんなときにはあれしかない。流星くんを悲しませずに追加で買う方法。

「よし！ バイト1時間とテスト勉強1時間やったら引いていいことにしよう」

ファンの過度の課金をあまり喜ばない流星くんのためにランダムグッズを追加するときはこのルールを自分に課している。バイト先のアイスクリーム店も人手不足でシフトを増やすと喜んでくれる。成績も安定して単位を落とさなくなった。

「というわけで、バイトだ！ 流星くんのアクスタゲットのためがんばらないとね」

張り切っていたおかげでアイスクリームはいつも以上に売れた。お客様からも「あなた明るくていいわね」って褒められた。やっぱり推し活は生活を良く

するんだ。これで罪悪感なく追加のアクスタを買える。ホクホクしながら近くの公園に向かう。流星くんのドラマをリアタイするためだ。電車だと独り言が言えないし落ち着かない。

「ねえ、君」

耳元に囁かれてびっくりする。慌てて片方のイヤホンを外す。わたしの背後、触れるほどすぐ近くに男性が立っているのを感じる。

（おかしい、さっきまでこの公園誰もいなかった）

公園の入り口が見える方向のベンチに座っていた。死角である後方はフェンスで区切られていて公園に入るのは不可能だ。

（怖い、変質者かも。いやお化け？）



「夢？　ありがちだけど夢オチ？　都合よすぎるもんなく。夢なら夢でいいんでもう少しこのまままでお願いします！」

「君、よくしゃべるね。　とりあえず、夢じゃないよ。僕は君に会いに来たんだよ」

流星くんは私服の紹介企画の時と同じ服を着ている。私服なのに衣装なの？　ってくらいにセンスが良くて似合っていたあの服だ。肌はテレビのライトなんてなくてもピカピカうるうるだ。

「実物もこんなに輝いている流星くんがわたしに会いに？　意味が分からない過ぎるんですけど……」

「そうだよ、僕は熱烈なファンに毎日1人ずつ会いに行ってるんだ。今日は君だよ」

「そんなファンサある？ いや、あります？ 聞いたことないですけど！」  
大体、超人気アイドルにそんな時間あるのか。ツッコもうとしたら、爆弾を  
投下された。

「そんなことより、エッチしよ。ホテルとつてあるから」

「えっ!!! ええええええっ~~~~~~~~~~~~!!!」

公園中、いや確実に周辺の住民に迷惑がかかる大声を出してしまった。

「君、声大きいね。ベッドでもいい声で鳴いてくれそうだ」

「ちよっ、何言つて。やっぱ夢かも。流星くんはこんなこと言わないっ!」

目の前には毎日画面越しに食い入るように見てた流星くんがいる。単独ライブ  
目指して必死に稽古してた初期の頃から追っている。

そんなストイックでファン思いの彼と目の前にいる流星くんが一致しない。

外見はそのものなのに。

「困ったな、でもこっちが本性なんだよね。僕はファンと毎日エッチするため  
にアイドルやってるんだもん」

絶望だ。まだ認めたくないけど。そりゃあ、わたしは画面越しの彼しか見て  
いないけれど。実物の解像度が高くて情報量の多い彼自身の言葉を無視するわ  
けにはいけない。

「流星くんがファンと繋がってオフパコしようとするなんて、ありえないく  
く！ 解釈違いなんだけどくくくく！ これ担降り案件すぎるくくく」

やっぱり自分の中で許せなくて叫んでしまう。

「じゃあ、やめようか？ 君じゃない他のファンのところに行こうか？」



いたずらっぽく微笑みながら提案されると、やっぱりかつこよすぎて倒れそう。

「ううう……。それは、それで嫌かも……。でも、宗教上の理由からファンに手を出すアイドルは地雷なんです……」

半泣きになりながら言う。かなり身勝手だけど本当の気持ち。強火のファン心理は複雑でめんどくさいものだ。

「そっか。僕のファンはやめるんだ？　だったらせつなくなんだから一回エッチしようよ。それでファン辞めたらいいじゃん」

「確かに！　つていや、そんな話は簡単じゃないんです！　」  
「いいから、いいから」

そういうと流星くんはわたしの手を取って自分の手と絡めた。

（こ、恋人繋ぎ!!! うわーん！ 鼻血がでそう！ わたしの一度でいいから流星くんとやってみたいことランキング3位のやつ！）

もう考える余裕がなくなって、手を引かれるままについていくしかなかった。

昨今つかまりにくいと聞いているタクシーを流星くんは一発で捕まえて2人で乗り込む。

（どうしよう、週刊誌や誰かに写真を撮られたら！ 流星くんのアイドル人生に傷をつけてしまう）

そう思いながらも推しアイドルとお忍びでホテルへ向かうシチュエーションが夢みたいでふわふわして深く考えられなかった。ぽやーっとしていたら流星くんが呟いた。

「さすがにワープするとか羽が生えて飛んでいくとかは現実離れしすぎて、冷めちゃうでしょ？」

「ん？　ワープ？　どういう意味ですか？」

「いやこっちのこと。僕って意外と現実的なんだよ」

5分ほど走って降りたそこは都内屈指の高級ホテルだった。わたしでも名前を知っている。流星くんは変装もせずに手を繋いだまま歩いていく。鍵を受け取る彼の横でフロントスタッフの顔をちらりと見たけれど、顔色一つ変えていない。高級ホテル勤務のプロ意識がすごいからか、流星くんがなにかしら手を

回しているかは分からない。見つかるかもって緊張感と超高級ホテルへ推しと来たドキドキの相乗効果はすごかった。

（心臓破裂するかもしれない。遺書書いとけばよかったかも）

「着いたよ」そう言って入った部屋は超広かった。わたしの住んでいるワンルームが5個くらい入りそうだ。

「も、もしやこれはスイートというやつですか……？」

「ふふっ、そうだよ」

推しと高級スイートなんて憧れでしかない。流星くんはファンに手を出したりしないとか言いながら妄想はしてた。

正直に言うところとあらゆるシチュエーションを妄想しながら一人えっちしてた。ライブ終わりに楽屋に呼ばれてエッチ、電車で流星くんに痴漢されるとか、流星くんが上司でセクハラされるとか。

あくまでも都合のいい妄想を楽しんでいたわけで。実際の流星くんはトイレにもいかないし、性欲もない生き物だと思っていた。

妄想を思い出す。ルームサービスでシャンパン飲んで、お風呂と一緒に入って「ずっと好きだった」って言われて優しく抱かれて、起きたら指にダイヤの指輪が嵌めてあってプロポーズされる。

ぽーっと妄想に入り込んでいたら、気づいたら手を引かれてベッドまで来ていた。

そのままベッドに押し倒された。

「きゃっ」

ぽふんってベッドに埋もれた。高級な寝具はとっても柔らかい。けれど、少しだけ強引さを感じた。流星くんならお姫様抱っこしてくれそうなのに。

「あれ、シャンパンは？ いや、これは妄想だった。それにしてもシャワーとか……」

「ふふ、僕もう待てないよ。汗の匂いも好きなんだ」

ベッドサイドに立ってわたしを見下ろしながらペロリと舌なめずりする。妄想と現実とは全然違う。流星くんってこんな感じだったっけ？

流星くんがベッドに上がって横になったわたしに覆いかぶさる。両手はわたしの左右の肩の横辺りについて、脚はわたしの腰を挟むように膝立ちをしている。顔が近い。顔を見るとやっぱりずっと見てきた流星くんの美しい顔だ。

（この顔に見つめられると。何も考えられなくなっちゃう）

流星くんの芸術品みたいな長くて綺麗な指がワンピースのボタンに伸びた。

美しい所作で流れるように上から順にボタンをはずされる。見惚れてしまって4個目に手がかかったところでようやく我に返る。

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ、まだ心の準備がつ、それにまだ推しと繋がるといふ大罪を犯す覚悟ができてなっ、むっ♡んっ♡」

温かくて柔らかい唇が押し付けられた。少し湿っていて生々しい。

「いいから。黙って」

（こ、これは、伝説のうるさいお口をキスで塞ぐやつ！）

言われた通りに黙らされて、ボタンを外す手の動きが再開する。前開きのボタンをすべて外されて左右にワンピースを開かれると、ブラとショーツが露わになる。

（わたしなんかの体が流星くんの目に映るなんてお目汚しすぎる）

淡いピンクのフリルの付いたペアの下着。ピンクはもちろん、流星くんのメンバーカラーだ。

「これ、僕のメンカラだよ。僕の色の下着つけてるんだ。心の奥底では僕とエッチしたかったってことかな」

（……バレてる。これ着て気分盛り上げて一人えっちしてるなんて死んでも言えない）



ワンピースの袖を片方ずつ抜かれる。脱いだワンピースはベッドの横の一人掛けソファに掛けられた。下着姿にされて体を固くしてそのまま無言で横たわるしかない。

「緊張してるの？ 大丈夫だよ、力抜いて。どうせ我を失うほどイキ狂うんだから♡」

「イキ狂う……そんな、やっぱり流星くんの言葉選びからかけ離れて……」  
「僕の何を知っているの？ 画面の中の僕しか知らないよね。本当の僕はこっち」

そう言うと、ブラの中央を掴んで上にずらした。ホックを外さないまま引き上げられたブラの下から丸いおっぱいがぷるん♡と顔をだす。胸の上の方にはず

り上げられたブラが食い込む。押しつぶされるように下の方に重たげに脂肪が寄っている。

「やあ♡おっぱい、見ないでえっ……♡」

潰された乳房を下から持ち上げるように両手で掴まれた。ひんやりとした手に、ぞわっ♡とする。たぶたぶ♡とブラにぶつけるように揺らされる。

「乳首も僕のメンカラだね♡薄ピンクかわいいね♡」両方の親指の腹で乳首をこすこすっ♡って撫でられた。

（乳首触られちゃった。憧れの推しに♡頭おかしくなりそう♡）

「ひい♡やだあ♡恥ずかしい♡」

先端から痺れるような快感がもたらされる。

「嫌なの？ 乳首、硬くなってきてるよ？ ほら」親指の爪を立てられてコリコリッ♡て擦られた。

「あっ♡んんっ♡」強弱をつけて擦られて、ほじられる。

（乳首、弄られてる♡こんなコリコリ♡ってされたら乳首立っちゃう♡気持ちいいよぉ♡）

「やだぁ♡やっ♡」肩を揺らして快感から意識を逸らそうとすると、きゅっ♡と尖った肉粒を摘まれた。

「あんっ♡」敏感なところへの刺激に声が漏れる。

「嫌じゃないくせに。乳首勃たせて、喘いでさ」

「だって……♡流星くんはこんなことしないもん……」

「この期に及んでまだ言う？　綺麗ごとばかり言うお前を俺のちんぽで屈服させてあげる」

（俺……？　流星くんが俺って言った？　解釈違いだよ……♡）

背中が手が回ってブラのホックが外される。乳首の上で戒められていた乳房が解放される。

右の胸に流星くんの頭が近づいて、ずっぽり♡口に含まれてしまった。口内は生暖かくて唾液をくちゅくちゅ♡ちゅぱちゅぱ♡言わせながら赤子のようにしゃぶられる。同時に左の乳首を弄る手も止まらない。

（おっぱい啞えられてしゃぶられてる♡えっちな舐め方されてる♡気持ちよくっっておまんこ濡れてしまう♡）

くにくにつ♡きゅっ♡きゅっ♡コリコリ♡カリカリっ♡

左胸は乳首を摘まれたり、爪で引っかかれたりしてねちねちと責められる。右胸も舐め方が変わった。口を尖らせて先端の一番感じやすいところを唇で押しつぶすように吸われてしまう。

「っふぁ……♡ら、だめえっ……♡」手を握りしめて身悶える。

「感じてるのが丸わかりだ。人間の女なんて結局みんな同じだな」

「にんげんの女……？」憧れの推しである流星くんに酔っているのか、快楽に惑わされているのか。そもそも夢かもしれない。良くわからないことを言われている。

「そうだよ、みんな最後は俺のこと嫌になるくせに」

言うなりショーツを乱暴にはぎ取られた。胸への愛撫で既に割れ目の奥がじゅわ♡って濡れてるのがわかる。

「あっ♡いやぁ♡でもっ♡そんなっ、りゅ、流星くんのこと……嫌いになるはずない」羞恥に耐えながらも必死に言う。

「嘘だね」言い終わるやいなや、下腹部の割れ目にほっそりとした指が触れる。

「ひぁっ♡」溢れる愛液で指を濡らして、しっかりと密着させて前後に動かす。指の動きに合わせてくちゅ♡くちゅ♡って水音が漏れる。

（お風呂入っていないおまんこを流星くんの指が触ってるぅ♡こんなのダメ……♡いやらしい音してるっ♡恥ずかしい♡）

「憧れのアイドルとエッチ本当はしたかったんじゃない？ おまんこびちよびちよだよ？ 自分に正直になる？」

「それはっ……♡触るからっ♡」

「ふーん、認めないんだ。じゃあ、これはどう？」

ほの赤い花唇をくいっ♡って二本の指で開かれる。隙間からとろり♡と蜜が垂れる。淫らな穴に指が挿入される。

「ひあっ♡あっ……♡」

指はぬるっ♡した体液を絡ませて滑らかに奥に進もうとする。膣壁は迫いすがるようにうねうね♡って絡みつく。蠢く粘膜を愛でるようにぬちゃ♡ぬちゃ♡って音を立てながら掻き混ぜられる。遠くから快感がやってきているのを感じる。

（あっ♡だめ。続けられたらまずい♡）

じわじわと襲ってくる気持ち良さから逃げるように足に力を入れてしまう。

「ふふ、ここでしょ？ 入り口。君の好きなところ」

折り曲げた指がお腹側の性感帯をトントン♡って叩いた。

「んっ♡ふ……♡そこっ♡りゅう、っせいくん、あっ♡ダメですう♡」

バレてしまった。いつも自分で慰めて開発している場所が。ずぶっ♡って愛液を溢れさせて二本目の指も入れられる。

ぬちゅぬちゅ♡トントン♡ぐちゅう♡コスコス♡

「ひい♡だめっ♡っむり♡そこ♡だめなのお♡」



涙をこぼしながら拒否する。弱いところを狙われて、的確に刺激される。快感が腰に広がるように響く。遠くにいたはずが決壊寸前にせり上がって来ている。

「許してほしいの？　だめだよ？」

そういうとキスされた。舌をねじ込まれてじゅぷじゅぷ♡って唾液を流し込まれる。レロレロ♡って舌が絡みついてくる。

ずぼずぼっ♡ぐちゅちゅ♡ずぼっ♡ずちゅう♡くちゅ……♡

キスと同時に指がぬるぬる♡のおまんこに水音を響かせて激しく抜き差しされる。

(だめえ♡キスとおまんこ……こんなに強くされたら……気持ちよくて♡も  
う、もう……♡)

「いきそうだね？ イクときはちゃんと行ってね」

「気持ちいいっのお♡……りゅせつ……くん♡に指でっ♡おまんこぐちゅぐち  
ゅにされるのが♡あう♡もっ♡もう、いっちゃう♡いく♡いく♡んっ♡  
あっ♡あああーっ♡」

おまんこに指をくわえこんだまま絶頂に達してしまった。ヒクヒクと膣壁が  
指に吸い付いている。

「良くできました。やっと素直になってきたね。ご褒美あげようね」膣の中に  
いる2本の指とは違う、外にいるもう1本の指が割れ目の上の突起に触れる。

「にやつ……♡あんっ……♡そこっ♡クリらめっ♡いったばかりなのに♡また  
イっちゃう♡イっちゃ……う♡♡」

（指でいいとこトントン♡ごちゅごちゅ♡ってやられて♡イってしまっ♡ク  
リまで触られたら死んじやう♡）

「クリトリスこんな大きく勃起してる♡ちゃんと触ってあげるからね」

くにくに♡コリコリ♡コスコス♡コリコリコリ……♡

コリ♡♡って硬くなってるクリを扱かれ、引っかかる。

「やらっ♡らめっ♡だめ♡あ♡きもちい……の♡止まん♡に♡あ♡いい♡ん  
っ♡♡……♡イっちゃう♡イグっ♡イグうっ♡あんっ♡うっ♡ううーっ♡」

達したばかりの体はすぐに絶頂を迎えてしまう。息は上がり、肉鞆はびくんびくん♡と痙攣している。

「ふふっ♡まだまだいっぱい♡こうね♡たくさんイクほどおいしくなるから♡」

（おいしく……？）

「も、もう♡これ以上、壊れちゃう……♡」

連続でイカされて、呆然としていたらピンクの色彩がおまんこに寄っていく。ピンクなのは彼の頭髮だ。

（ん？頭がおまんこに近づいていく……？）

「らっ、らめっ♡見ないでえ……♡」気づいてとっさに反抗しても当然とまらない。

「イって濡れ濡れのおまんこの匂い♡この距離でも漂ってくる♡」

色欲で別人みたいに目をギラつかせた顔が陰部に近づいていく。見せつけるように流星くんはレロッ♡って舌を出す。唾液が絡みついた長い舌がクリトリスをペロリ♡と舐めた。

「ひいんっ♡あっ♡も、だめ……♡また、イっちゃうからあっ♡」

ペロペロと舌でぶくっ♡と立ち上がったクリトリスを舐め回す。

「何回でもイかせてあげる」

溢れる蜜と唾液を混ぜ合わせてじゅぼじゅぼ♡と音を立てて割れ目を舐められる。

(舌……ヌルヌルで♡おまんこ気持ちいいよ♡だめ、またすぐにイっちゃ♡)

舌が肉びらを割ってぬちゃあ♡って蜜壺に侵入してくる。

「あっ♡いやあ♡んっ……♡だめえっ……♡中に舌入れたらあ♡」

舌が狭い膣壁を広げながら暴れるように進む。触れて擦れたところがたまらなく気持ちがいい。じゅっ♡って強く吸われたり、クリトリスをコリコリって扱かれたり。

「やだやだやだ♡イくう♡イっちゃうのお♡ああ♡」

変化をつけて責められてあっけなくまたイってしまった。おちんちんが欲しいって膣壁がきゅきゅ♡って収縮する。

「君のおまんこ美味しかったよ♡上手にイけてえらい♡」

（イキまくって、おまんこ壊れちゃう……♡）

さすがに体力が持たない。だらしなく半開きの唇から涎が垂れている。はあはあ♡って喘ぐように呼吸をする。

（肌の熱さ……汗の匂い。キスした時の唾液の味。画面から見ただけでは何も知らなかった）

手の届く距離にある流星くんの顔を改めて見つめる。

（王子様なんかじゃない。荒々しくて俺様で。いやらしい言葉で責めてきて。ファンに手を出す彼も彼なんだ）

唐突に悟る。

（わたしの知ってる画面越しの彼は一面でしかなかった……）

「ふん、みんなそうだ、この姿の時はこうやって喜んでいくせに……」

流星くんがそう呟いたと思ったら、イライラしたように自分のベルトに雑に手を掛ける。カチャカチャと小さく金属音が鳴り、ぼろん♡って剛棒が姿を現した。

とても流星くんの持ち物とは思えない代物だった。色白の彼からは想像できないほど赤黒い。数少ない経験と比べてもこんなに大きくて太いモノは初めて見た。パンパンに満ちた亀頭から溢れるように先走りが垂れていた。猛るように垂直に立ち上がっている。太い血管がビキビキ♡って絡みつくように走っている。

「怖い？ 辞めないからな。俺に屈しろ。身も心も俺のものになれ」



ズクズク♡とおまんこの奥が疼く。散々高められた体は巨大な男の器官を受け入れたがっていた。

「くだしい♡はやくっ♡アイドルとかもういいからあっ♡そのおっきなおちんぼをわたしのおまんこにぶちこんでえ♡」

散々御託を並べていたのに、快感に屈し、手のひらを返すように懇願してしまう。

「心をくれ。本当の俺を見ろよ」

「はい♡心もすべてあなたのもの……♡」

先端がぬちゃ♡って水音を立てて割れ目にあてがわれる。待てなくて腰を浮かせて陰唇をこすりつけてしまう。擦るだけのつもりがぬばお♡って滑って龟头をおいしい♡って飲み込んでしまった。

「あっ♡先っぽ♡はいっちゃった♡」

「ふっ、淫乱まんこだな」

ずぶっっ……♡ずぶっ♡

流星くんが腰を沈めると巨大な男根がミチミチ♡と膣壺を埋めた。長くて太いソレをもっと奥まで飲み込んでしまいたい。褌が嬉しいがみたいにきゆうきゆう♡って絡みついて形を変えていく。

「ひいっ……♡はあっ♡ああっ……♡流星くんの……おちんぽ♡入っちゃったあ♡」

腰を揺らしてぐりぐり♡って牡莖をもっと深くまでねじ込もうとする。押し込まれる度に質量を否応がなく感じさせられる。

「お前のおまんこいやらしいな♡吸い付いてちんぽ締め付けてくる……♡」  
眉間に皺を寄せて感じ入る表情が色っぽい。

（入れられただけで、こんなに気持ちいい♡これからどちゅどちゅ♡ってピストンされておまんこの奥に精液だされちゃう……♡）期待でまたきゅん♡って膣が疼く。

「動くの待てないの？ いやらしくて悪い子だね♡どうされたい？」  
「りゅせい……しゃま♡……の極太おちんぽでえっ♡おっおまんこ奥まで……ずばずば♡って突かれないでしゅ♡」腰をフリフリ♡って小刻みに震えさせてねだってしまう。

神聖な推しに触れてはいけないと思っていたのに。何度も絶頂を繰り返して、今はもう、めちゃくちゃにされたい。何も考えられない。

「ふん……アイドルと獣みたいにまぐわう気持ちはどう？」

剛棒をずぶ♡って途中まで引き抜かれる。ヒダヒダがうねうね♡っておちんちんを探すように蠢く。勢いよくどちゅん♡ってぶつけるように長い牡根が膣孔へ戻っていく。

「っああ♡♡♡ もう、もう……♡いいですう……♡アイドルとかっ♡……ううっ♡どうでもいいっ……♡だから……♡もっと、おちんちんでっ♡あっ♡♡……奥までえ♡突いてえ♡」

重めの一撃にばちばち♡って快感が稲妻のように走る。じゅぶ♡って愛液も陰唇からこぼれる。

「ふん。俺に屈したな。いいだろう……壊してやる。今度こそ俺のものになれ  
っ」

（こ……今度こそ？）

どういふことか考える余裕はなかった。抜き挿しの動きが速く強くなっ  
ていく。

おちんぼが蜜を絡めてぢゅぼ♡って引き出される。ナカに入るときはばちゅ  
ん♡って音を立てる。それに腰をぶつけるぱんっ♡って音が加わる。

（流星くんとこんな下品な音立ててセックスしてる♡気持ちいい♡気持ちい  
いよお♡）

ずちゅう……♡ぱんぱんっ……♡どちゅんっ♡どちゅっ♡ぱんっ♡

「膾が生き物みたいに絡みついて、締め上げてくる……♡」

逃すまいって膾壁がちゅうちゅう♡と怒張にキスをしているようだ。さらに強い一撃がどっちゅん♡って膾奥に叩き込まれた。

「んお♡らあ♡らめ♡まだ、まだ……いきたくないの♡一緒にいきたいの♡イっちゃう♡あ♡♡」何度目だろう、またイってしまった。膾全体をぴくぴく♡って痙攣させて放心する。

「何度でもイけばいい」

「だめ、いったばかりなの♡♡待って♡」

激しい抽送が再開する。いったばかりで苦しいのに、動き始めるとまた快感はすぐに襲ってくる。

「やあっ……♡んっ……♡、ううあっ♡……ダメえ♡おかしくなっちやう♡ん♡」

いきすぎて、子宮が下がって来ていたのか子宮口に肉棒の先端が届いて触れてしまう。

「ひいっ♡あっ♡ん♡う♡……い♡や♡だっ♡こ♡こ♡っ♡あっ♡」

「ふふっ」流星くんはおもちやを見つけた子どものように嬉しそうに笑う。嫌な予感がした。

どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ♡どちゅ…♡

一点集中で肉棒を子宮口に打ち付けられる。

「ふうあっ……だめっ……♡お♡イぐっ♡イぐう♡イっちやうううっ♡」

「俺もイクっ……♡」

そういうと蜜でどろどろ♡のおちんぽを膣口から抜けるぎりぎりまで引き抜いた。

ばっつちゅんっ♡



一気に子宮口まで貫くように差し込んだ。バチバチ♡って快感が視界を飛ばす。ふわあ♡ってなるみたいな強い快感に包まれる。直後に怒張が波打つように震える。

[illegible]

大量の熱いほとばしりがおまんこに大量に放たれた。

「あちゅい♡精液っ♡熱いよぉ♡流星くんの精液……♡熱くて……♡」

凄まじい快感で一瞬意識が飛んだのかもしれない。

目を開けると視界が暗い。なんだか足の間が圧迫感で苦しい。

射精して萎えているかと思ったら、勃起おちんぽよりさらに大きなモノが入っている……？ 目線をあげるとわたしのおまんこにおちんちんを挿入しているのは全くの別人だった。

王子様みたいなアイドルである流星くんではなくて、身長が2メートルを優に超えるくらいありそうな大男だ。浅黒い肌・銀髪の筋肉隆々で金の眼と二本の角が生えているのが異様だ。

「えっ！ ええええくくくくく？」

一気に正気に帰りたいが、現実離れしすぎて戻れない。まずは状況把握だ。「情報量が多いっ、別人とエッチしている状況も意味わかんないし、大男すぎるし、筋肉すごいし。ってか角生えてるじゃん？」

状況を把握しても一向に事態は良くならなかった。むしろ混乱が深まった。

「はーはっはっはっは〜！　なかなか美味い生気だった！　でかしたぞ、お前」

さつき見た流星くんのソレよりもさらに長くて太くてドス黒い肉棒をずるんっ♡って抜きながら大男は高笑いした。

「……せいき？ と、とりあえず、あなたは誰？ 流星くんはどこへ行ったの……？」

常識離れた事態すぎて、尋ねたところで答えてもらえるかは分からなかったが、聞いてみるくらいしかできることもない。

「俺は淫魔さ。人間の生気を吸って生きる悪魔。生気を吸えるのは中出しセックスで射精した瞬間なのさ」律儀に悪魔が説明してくる。

「今日一日でどれだけ詰め込んでくるの……。もはや否定する気力もないわ」

全裸だったのでシートにくるまりながら脱力してしまった。

「だったら、流星くんはどこなんですか？ あなたが消したの？」

「ふんっ、あれは俺だ。姿を変えているだけで俺だ。みんな昼の姿ばかり気に掛ける」

少し気分を害したように言う。流星くんとは似ても似つかないが、さすが悪魔だけあって人間離れた美しさだ。彫刻のような筋肉の付き方も長い手足も彫の深い顔立ちもこれぞ人外といった感じ。

「なんでまた昼はアイドルしてるんです？ 悪魔ならそんな面倒なことしなくても適当に攫ってくればいいのでは？」謎が深まるばかりで続けざまに質問してしまふ。

「俺はグルメなんだ。極上の生氣しか吸いたくない。適当にさらってきたのなんて食えたもんじゃない。そういうのが好きな淫魔もいるけどな」

「極上の生氣ってどんなのですか？ 適当なのとどう違うんですか？」

「ふふ、射精していったときに女の快感が強ければ強いほどまい。嫌がる女の生氣はクソまずい」

（淫魔ってそんなシステムなんだ）

「長年、生氣を食らってきて気づいた。快感を高めるには俺のテクニクだけでは限界があるらしい。人間ごときが生意気だが仕方ない」

思わず吹き出しそうになった。

（不思議。謙虚に相手からの評価を受け入れる姿勢は見た目が全然違っても流星くんみたい）

淫魔の彼は続ける。

「色々試しているうちに、女の好いている男に姿を変えてハメてみた。そうしたらイキ狂って最高にうまい生気を吸えたのさ」

（研究してるっ！ やっぱり流星くんみたい！ ファンのために努力してるところが似てる、って本人だから当たり前か）

「どうやら人間の女は自分の好きな男、中でも手が届かないほどの憧れの存在とのセックスは失神するほどいいらしい」

（それは分かる気がする。現にわたしも憧れの流星くんとエッチできて、天に召されるかと思ったもん。あ、天使じゃなくて淫魔か）

「だから、昼間はアイドルやってるんですね」

「そうだ、射精の時は生気を吸うために元の姿に戻ってしまふ。もし仮の姿のまままでいられたら楽なんだが……」

（めっちゃ不便じゃん……。淫魔、大変だな）

「ふん、お前たち人間はわがままだ、最初はおまえと同様に喜んで抱かれるくせに。この姿を見たら怖がって泣きわめく」

「それはまあ、びっくりはしますよねえ」今までどれだけ数多くの女性が天国から急転直下の驚きを与えられたかと思いを馳せてしまふ。

「この姿を見た女とのセックスはまずい生氣しか得られない。だから日替わりにしてある。仮の姿がアイドルなのは使い捨てにしても吐いて捨てるほどファンがいるからな」

「それは……淫魔も結構大変なんですわね……」

「ふう、美味しい生氣だったぜ。これでお前とはおさらばだ。悪かったな。でももう会うことはない」

淫魔の彼は立ち上がる。ふわあって風が吹いて一瞬でいかにも淫魔って感じのセクシー衣装を身にまとっている。さっきまで全裸だったのに。

「えー!? そんな、でもそうですよね、一度会えただけでも奇跡みたいなのに……もう一回だなんて贅沢すぎますよね」

「もう一回? おい、お前俺とまた会いたいのか……?」

「はい! そりゃあ、会えるなら何回だって会いたいです」  
自分でも驚いたが正直な気持ちだ。



（テレビで見てた時のイメージとは違ったけど、ファンに手を出すのも淫魔ならしょうがないというか。吸わなきゃ死んじゃうんだろうし。生きるために真摯に頑張ってるわけで。それってやっぱり流星くんって感じするし……）

「俺の正体が恐ろしくなかったのか？」

「恐ろしい？　なんというか、ギャップにやられたというか……ギャップ萌えです」

思わず口から出たけれど、我ながら正に！って言いたくなった。そうなのだ。上辺しか知らなかったところを、淫魔という裏の姿も知れて、それもまた良くて。

「はあ!？」